

史遊会通信

NO. 176
平成21年
5月7日
発行

事務局
☎
03--3712
0651
下山田方

四月講演

長尾氏は主家上杉氏を継承して残った

千坂精一

坂東平氏から興った長尾氏は、同族の大庭氏（藤澤市大庭）、梶原氏（鎌倉市梶原）とおなじ地域の相模国長尾荘（横浜市栄区長尾台町）を本拠にした。

東国武士団が源頼朝を担いで蹴起したとき、長尾氏は大庭、梶原氏らとともに平氏方に属したが敗れ、大庭氏は景親が斬首されて滅亡したものの、長尾氏は定景が同門で源氏に加担した三浦義澄に預けられて生き延びた。

その定景は、三浦義村の命を受けて三代將軍實朝を暗殺した公暁を討って功名を立てたが、のちの五代執権北條時頼と三浦泰村が対立した實治合戦で討ち死にして長尾一族の名は消えた。

長尾氏が再び表舞台に現れたのは、室町期に入ってからである。

長尾景為が室町幕府初代將軍足利尊氏の伯父（母清子の兄）上杉憲房に登用されて執事になった。

そして、憲房の子憲顯が越後の南朝方新田義貞の残党を平定して越後守護になったとき、景為の子景忠が守護代になったが、その後憲顯が関東管領になって鎌倉へ戻ることになったので、景忠も越後守護代を弟景恒に譲って憲顯に供奉し、上野白井城（洪川市白井）に入って主君憲顯不在の上野守護代になった。

その白井長尾氏から足利、總社の二家が分家した。

例会のお知らせ

◎ 5月例会

日時 平成21年5月27日（水）

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 松川博光氏

テーマ 「近代観の修正」

自由執筆は太田精一・隆恵

中山喬央の諸氏。

締切りは5月末日

◎ 6月例会

日時 平成21年6月24日（水）

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 鯨游海氏

テーマ 「漢詩の作り方」と

「漢詩・船村徹先生讃歌」

自由執筆は高橋由貴彦・新井宏

千坂精一の諸氏。締切り6月末日

足利は室町將軍足利氏の所領であるが、それ以前に平將門を斃した田原藤太こと藤原秀郷系の足利氏がいた。

渡瀬川の北方現在の足利学校や鏝阿寺があるJR兩毛線足利駅を領していて、織姫神社背後の兩崖山（二五九メートル）の尾根道を二キロほど歩いたところの一帯に城跡がある。

源姓足利氏のほうは渡瀬川の南、東武伊勢崎線足利市駅から野州山辺駅にかけての一带梁田御厨を領していた。

藤原姓足利氏は兩崖山城に五代在城したが、平氏滅亡後足利荘は源姓足利氏の所領になったので北の足尾山地へ逃れたが、皆澤山中の小村で討たれ滅亡した。

そのあとへ足利長尾氏の景長が入って六代一二五年つづいたが、小田原北條氏に従属していたため天正十八年に滅びた。

總社長尾氏は、聖武帝十年の天平五年に上野国内の名社五四九社を勧請して上野の總社神社としたことから現在の前橋市一帯を總社（惣社）といっていたこの地の蒼海城（元総社町）を本拠にしていたが、顯景の代の永祿六年武田信玄の上野攻めで總社神社ともども焼討ちされてしまったので、

越後の府内長尾氏の末裔上杉謙信を頼って落ち延びた。

その後、天正十一年の新発田攻めに出席して討ち死にしていまい断絶した。

白井長尾氏の居城白井城は利根川と吾妻川に挟まれた断崖の上にあった。

近くの子持山中腹にある菩提寺臨濟宗空惠寺裏山の歴代墓所中央にへ上杉禪秀の乱やへ永享の乱で大活躍した長尾景仲の宝篋印塔があつて宗家の墓所に相応しい。

その景仲が、近くに宗派のちがう曹洞宗双林寺を創り、月江正文和尚を招いて開山とした。

景仲の子景信が歿したとき、主君の関東管領山内上杉顯定は子の景春ではなく弟の總社長尾忠景を家老に取り立てたので、景春に泣きつかれた扇谷上杉定正の家老太田道灌（資長）が調停に乗り出したが、顯定に内政干渉と誤解されて不調に終わった。

憤懣遣る方ない景春は古河公方足利成氏と提携して鉢形城（埼玉県大里郡寄居町）に拠り、武蔵の豪族たちを取り込んで叛乱を起こしたが、結局道灌に鉢形城を陥とされて古河へ逃れ、成氏を頼った。

その子景盛（一聲齋）は、主君関東管領

上杉憲政が北條氏康に逐われて上野平井城（藤岡市）に追い詰められ、あわや滅亡の危機に晒されたとき、同族越後春日山（上越市）の長尾景虎を頼るしか家名存続の道はないと考えた。

しかし、景虎は越後守護上條上杉房能とその兄関東管領顯定を斃した謀叛人長尾為景の子なので一抹の不安があつた。

そこで景盛は、南北朝以後上田荘（南魚沼市）から妻有荘（十日町市から中魚沼郡津南町一帯）にかけては山内上杉氏の所領であつたことから、旧臣の韓生（小千谷市）城主平子孫太郎房長を介して念入りに景虎の意嚮を窺い、得心したうえで憲政を春日山の長尾景虎の許へ忘命させた。

その景虎が、永祿四年三月小田原城を囲んで威嚇したのちに、鎌倉鶴岡八幡宮の社前において憲政から正式に上杉氏を継承し、政虎、輝虎と改名して謙信となった。

そして、謙信の養子になった甥の景勝があとを継いで戦国乱世を乗り切ると、徳川政権の幕藩体制における米澤藩初代藩主となり、白井長尾氏の系が長尾権四郎家として重臣の列に加わって幕末廃藩置県までつづいたのである。

自由執筆

タコハンチュツ・

ヒッコシャツロ

柴田 弘武

文久二年（一八六二）、尊攘派の圧力におされた幕府は、江戸・大坂・兵庫・新潟の開市・開港の延期をヨーロッパ諸国に認めて貰うため、勘定奉行兼外国奉行の竹内下野守保徳を代表とする総勢三六人（遅れて二人が合流し三八名となる）の遣欧使節団を派遣する。彼らはほぼ一年に亘る大旅行をするのであるが、一行の中には前年アメリカを訪問した福沢諭吉（二七才）や後の新聞記者福地源一郎（二二才）などがある。そして、御小人目付として高松彦三郎（四三才）なる人物がいた。

彼は嘉永六年（一八五三）から翌年にかけて築造された品川沖台場のいわば現場監督として派遣され、その過程を「内海御台場築立御普請御用中日記」として残した人物であり、安政三年（一八五七）から同六年まで長崎海軍伝習所にも派遣されている。そして今回は遣欧使節団の一員となった

わけだが、この使節団はヨーロッパ諸国では大変な歓迎を受け、新聞などにも多く取り上げられたようである。フランスの挿絵入り新聞「イリュストラシオン」の一八六二年四月一九日号には、日本人の名前がとも読みにくいことを記したなかで、数人の響きのよい名前として高松彦三郎が「タコハンチュツ・ヒッコシャツロ」として挙げられている（朝日奈美和子「東洋大」）。ところで彼らは所期の目的を達することはできなかつたが、福沢や福地などは大変な刺激を受け、維新後これが大いに役立った。しかし帰国当時彼らを襲ったのは凄まじい攘夷運動であつた。

そのことは福地源一郎の『懐往事談』に詳しいが、福沢諭吉の『福翁自伝』にも、文久三年（一八六三）神奈川奉行組頭であつた脇屋卯三郎が、親類に宛てた手紙の中で「まことに穏やかならぬご時節がらで心配のことだ、どうか明君賢相が出てきてなんとか始末をしなければならぬ云々と書いてあつた……」それが謀反人の嫌疑を受け、「そのまま当人は伝馬町に入牢を申しつけられ、なにかタワイもない吟味の末、牢中で切腹を申しつけられた。そのときに検視

に行つた高松彦三郎という人は御小人目付で私の知人だ。伝馬町へは検視には行つたが、まことにきのどくであつたと、あとで彦三郎が私に話しました」とある。時代状況がよくわかる話である。

しかし私が驚いたのはそのことではなく、ここに彦三郎の名が出てきたことであつた。というのは、彦三郎は高松家の菩提寺蓮光寺の過去帳によれば、文久三年四月二十四日に死亡していることになっている。ところが脇屋卯三郎の自裁した日を『柳営補任』や『藤岡屋日記』で調べてみると、それは元治元年（一八六四）一〇月一九日なのである。すなわち彦三郎は文久三年には死んでなかつたのである。

不思議なことはまだある。高松家の墓のある蓮光寺（文京区関口町）に行ってみると、その墓石には彦三郎の息子である陸軍工兵少佐高松寛剛夫妻と彦三郎の父である彦七郎夫妻の名は刻まれているものの、肝心の彦三郎の名が無いのである。

幕末動乱のなか高松家では彦三郎の名を隠さねばならない何かがあつたとは思われない。

自由執筆

我が国最古の通貨「和同開珎」は
「かいちん」か「かいほう」か

鯨 游海

先般、新井宏会員から掲題の訓みについて私見を問われた。氏自身は「ほう」宝」説で、卓越した論考が同人誌「まんじ」112号21年5月1日発行」に掲載されている。

私も「ほう」と習った記憶があり、長年そう訓んできたが、近年は「ちん」珍」説が優勢で学校でもそう教えている。改めて周りの人に尋ねてみると年輩者に「ほう」、若年層に「ちん」が多い。一体誰が何時、どのような根拠で変えたのだろうか。

新井氏によると歴史学者穂井田忠友、考古学者山中笑らが戦後の著作で提唱したという。実は江戸時代には「ちん」が通説だった。これを狩谷棧斎が「ほう」と論証した後、成島柳北らに引き継がれ、明治、大正、昭和前半迄は「ほう」が通説だったのに戦後、狩谷棧斎以前に後退していったという。所で辞書によると珎は「A珍の俗字。B宝」寶の」うんぎと珎を省き、缶↓ルに変形

した略字」とある。珍も宝も珍宝と熟する通り「貴重な品」の意で、両者に意味の違いは無い(少ない)。要は珎を俗字とみるか、略字とみるかである。なお同は年号の和銅の略字を用いている(異説もある)。さて「和同開珎」(別図下)は、和銅元年(七〇八)に発行されたわが国最古の銀貨と銅貨。円形で中央に四角い穴があり、時計廻りに北東南西の位置に四字が刻まれている。意味は「和銅に発行する開かれた珍宝」と読めるが、開の意味が何かしつくりこない(実はこの事がヒントとなる)。

貨幣にあやかうと模倣したに違いない。豊富な資料と文献、金石文や仏像に刻まれた文字、以後に発行された皇朝十二銭等後世の例、中国通貨の諸例等詳細な考証を元に論理的、実証的に述べられた新井宏氏の卓論は、極めて説得的で同感出来、私も「ほう」説を採るが、氏の論考にも他の学者の説にも見当らない視点から私見を述べてみたい。

今一度「和同開珎」を眺めてみる。

一は珍と珎の字画数が共に九画であること。同画数なら正字の珍を用いた筈。公的權威を示さねばならない通貨に態々俗字を用いる必然性は無い。即ち珍ではないことになる。また十四画の銅は、六画の同と略字を用いている。つまり俗字より略字を上位にみていることになる。

二は開の字に注目したい。何故通しなかったのか。通貨というからには「流通し通用する貨幣」であり、開より通が自然である。然も他に開を使った例は皆無である。

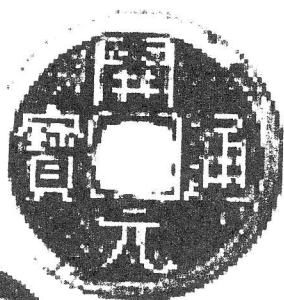
このことはお手本とした「開元通寶」の四字の頭尾を採って「開珎」と短縮したのではないか。漢字には四字を二字に短縮表記する例は多い。謹言実直を謹直、大阪神

字の配列は北南東西の順で異なり、意味は「世の元を開き広く通用する宝」と読める。先の「和同開珎」の読みよりしつくりくる。武徳とは、随を亡ぼした唐朝最初の年号で、この大唐帝国を象徴するめでたい

戸を阪神の如く。更に寶については十九画と複雑なので、鑄造技術上から九画の珎に簡略化した。

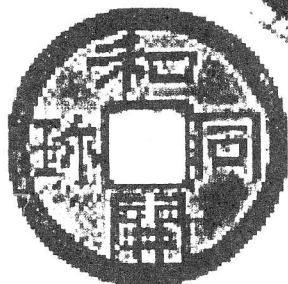
つまり「あの世界に冠たる大唐帝国を開いたためだたい開元通寶にあやかっけて創った『和銅の開元通寶』であるぞ」と宣言していると思うのである。但し意気旺んな新生独立国のアイデンティティを出すべく字の配置を工夫した。独立語の漢文に対し膠着語の和文の場合、字順が接着連続している方が落ち着く。

たかが一字の訓み、されど眞実は一つ。博雅の反論、ご叱声を俟つ次第である。



開元通寶
武德四年(621)

和同開珎
和銅元年(708)



自由執筆

ある山狭村の文学散歩

―三島由紀夫『奔馬』―

山本 鎮雄

私は退職をきっかけに二地域に居住し、晴耕雨読の生活を始めた。東京の郊外の自宅ではもっぱら本読みと物書きで過ごし、一週間に一回、JR中央線に乗って妻の実家がある山梨県大月市梁川町に出かけ、二百坪の畑で野菜作りに取り組んだ。

最初はしんどかったが、デスクワークで鈍った身体を思い切り動かし、身体になるべく負荷をかけた。身体の疲労がかえって精神を快適にした。ゴルフやジョギングは趣味と健康に最適だが、野菜作りは収穫という実益がある。

あとで述べる作家の三島由紀夫は、多忙な暮らしにもかかわらず、自らの健康法として一週間に二回のボディビルと一回の剣道を日課にした。作家活動その他で神経が十疲れても、肉体は三しか疲労しない。そこで、運動によって肉体を十まで疲れさせ、肉体十と頭脳十のバランスを心がけ、しば

らく休養したあと、精力的に仕事に取りかかるそうだ。

私自身は三島ほど超一流の仕事はしていないし、「肉体の改造」に賭けたこともないが、野良仕事で肉体を疲労させ、神経とのバランスを保っている。そしてメタボの私は農閑期には二キロほど太り、農繁期には畑でびっしりと汗をかいて二キロほど痩せた。

私は最初は定年前の生活習慣から週末に出かけ、畑に野菜作りのテキストを持ち込み、野良仕事に励んだ。耕耘機や刈払機で雑草を取り除いても、すぐ雑草は生えてくる。週一回の野良仕事では手が回らず、雑草は生えるに任せるしかなかった。

畑の雑草を見た古老から「あれじゃあ、畑をダメにする」と盛んに陰口をたたかれたが、これは伝統農法ではなく、自然農法だと居直り、陰口を無視することにした。その後、「毎日が日曜日」のわが身を考え、快晴の週日を選んで出かけることにした。

晩秋の梁川

私が通う梁川は相模川の上流部の桂川をはさんで丹沢山地の北端、秩父山地の南端にある。二段の河岸段丘の平坦地に集落と

田畑が点在し、斧窪、彦田、立野、綱本、原などの集落からなる。江戸時代初期から昭和初期まで養蚕と甲斐絹を生業にした。最盛期にはガチャ万機屋の織機がガチャン、ガチャンと鳴るたびに万の金が入る——という言葉が流行した。

この山狭村は、三島由紀夫の絶筆となった長編小説『豊饒の海』第二巻『奔馬』十二章以降に登場する。私は『奔馬』（新潮文庫、一九六九年）の刊行後、本書を携えて晩秋の梁川の集落、紅葉の山野、桂川の溪谷を散策し、三島の風景の観察力と巧みな描写力に改めて敬服した。昨年、晩秋の梁川に出かけたが、畑は数日來の雨でぬかるみ、野良仕事をあきらめ、久しぶりに『奔馬』に登場する舞台を散策した。

ところが、最初の散策時、三島が書いた朽ちかけた吊橋（「釜橋」、その当時は通行禁止）、立野の集落にある半鐘を吊した火の見櫓、草に埋もれた嘉永年間の大念仏供養の石碑を見かけたが、昨秋の二度目の散策時には、それらはすべて撤去され、目にすることは出来なかった。

『奔馬』は血盟団事件、五・一五事件などの右翼や軍部によるクーデター事件が頻

発した昭和七年の設定で、右翼塾の塾頭の飯沼茂之は旧知で判事の本多繁邦を誘い、息子の勲が合宿している甲斐国南都留郡梁川に出かけた。その当時、梁川は新宿駅から中央線で二時間近い塩津駅（現在、四方津駅）で下車し、桂川沿いに一里ほど歩いたところにある。

神道の篤胤派の崇拜家の真杉海堂は、梁川の河岸段丘に二町五反の田畑を持ち、神社と禊所と練成会の道場を主宰している。

三島は古い吊橋を渡る情景と周囲の風景を次ぎのように幻想的に描写している。

この朽ちかけた吊橋が、丁度淵と瀬を分けている。渡りきった本多は、肅々と吊橋を渡ってくる若者たちの姿を見返った。橋板にはとどめもない震動が軽くにじんできている。あとに残した岸の榎林や桑畑ややつれた白膠木の紅葉や、官能的なほど黒い幹から赤い実一つをかざした柿や、袂の小屋を背景に、一人一人玉串を提げて来る若者が、橋半ばで、折から山の端の雲をわずかに破った西日によって照らされる。

三島文学の魅力の一つは的確な風景の描写であろう。三島はおそらく小説の構想を綿密に練り上げ、現地を丹念に取材し、情景と心象を融合して創作したのであろう。『豊饒の海』に限っても、三島は国外ではインドの聖地ベナレス、タイの首都バンコク、国内では奈良、大阪、京都、熊本、そして梁川などの各地を精力的に取材した。ところが、三島文学に精通した文芸評論家、雑誌・出版社の編集者の誰もが、『奔馬』の決定的な舞台の一つ、この梁川には触れていない。そこで、梁川について言及してみたい。

私は梁川の綱本の田園の畔道を歩きながら、陶淵明の「田園まさに蕪れなんとす」という一句を思い出し、桂川の川原に來た。私は「ここかな」と思い、しばらく瀬音と岩走る水の流れを見聞きた。ここで『奔馬』の主人公の飯沼勲が昭和神風連の同志とともにクーデター計画を謀議した。

一同は黙々と勲に従い、田の南端の巨岩の杜のかげへ来て車座を作った。見下ろす瀬は、あたかも桂川が直角に曲がるところで、瀬音は高くさやいで

いる。対岸の峻険な断崖は、灰白色の岩肌が歯齧^{はが}みをしているような強い忍耐を汲^うべ、そこからさしのべた紅葉の枝々も、早くから日影は入って暗鬱な色をしているが、はるか見上げる頂の本立の空だけが、光りかがやく夕雲の乱れを覗^{のぞ}かせている(二十四章)。

私は三島文学の熱狂的なファンではない。しかも「文学上の謎」、「思想上の謎」と言われる「三島の死」について全く関心はない。だが、三島のストーリーの展開、ロケーションとシチュエーションの設定、とくに情景の観察と描写には大いに感服した。真杉海堂は塾生に神道で言う柔和な和魂^{わこん}を招き入れることを奨励した。猛々しい荒魂^{あらたま}を持つ勲は、村田銃を片手に丹沢の山野を徘徊し、足もとから飛び翔つ雉子を射止めた。三島は勲が抱き上げた雉子^きの様子を克明に記述している。その後の勲の行動、つまり、経済界の要人の「暗殺」と自らの「割腹自殺」の終末を予感させるかのよう

に迷ったと記述している(二十三章)。その翌日の夕刻、一日の課業を終えた勲は昭和神風連の同志とともに、すでに触れた桂川の川原で車座となつて、帝都の治安を攪乱し、戒厳令を施行し、維新政府の樹立を促すクーデター計画と、その決行の日時を綿密に謀議した。三島は勲に託して、事件決行後に「どこかに自分を待っている清浄な切腹の座があるかのように夢みて」、死に場所を空想する。次で触れる「三島事件」の結末を予測させる。

『奔馬』創作ノートから

私の最大の関心事は、誰が三島に何の変哲もない山狭村の梁川を伝えたのか、三島がこの地に取材に来たとき、誰が案内したのか、ということである。

『決定版 三島由紀夫全集』第四十二巻(二〇〇五年 新潮社)の「年譜」によれば、三島は『奔馬』のために奈良の率川神社、奈良の大神神社、熊本では神風連関連の書籍を購入し、「昭和四十一年十一月八日(火)、『奔馬』執筆のため、山梨県の梁川を取材」して執筆を開始した。

さらに『決定版』第十四巻(二〇〇二年)には「『奔馬』創作ノート(三冊目より)」

が収録され、三島は晩秋の桂川の溪谷、梁川の里山や田畑、山野の樹木の情景を克明にメモしている。三島は立野から眺望した「山の図」をスケッチしたが、おそらく不鮮明のためか割愛されている。ただ「丹沢、鉄橋、甲州街道、御前山」その他の地名が注記されている。

さらに唐突に「警察庁次長、警備局長」という職名が注記されている。週日に二人の警察庁高官が、三島の取材に同行したとは考えられない。私は三島を案内したのは、おそらく現地に精通した非番の警察関係者ではないかと推定する。

三島は『奔馬』で勲が射殺して手にした雉子の姿態を詳細に記述している。「創作ノート」には詳しく猟銃の値段や許可書や猟期、さらに雉子の習性や姿態が精細にメモされている。三島の取材に協力したのが警察関係者一人か、あるいは彼が紹介した老練の猟師か、にわかに判明できない。

警察流剣道の結末

三島と警察官との接点はおそらく剣道であろう。原稿の締切に胃痙攣に悩まされる肉体的に非力な三島は、三十代になって自宅でボディビルの練習を始めた。その後、

ジムに通って、文筆のかたわら、本格的に「肉体の改造」に取り組んだ。さらに中央公論社長で剣道の達人の嶋中鵬二の紹介で第一生命本社の地下剣道場で剣道を始めた。三島は最初は「ドタバタ、シャモの喧嘩のような剣道」と述懐している。

その後、三島は東調布警察署の剣道助教の吉川正実七段に教えを乞い、毎週土曜日の「少年剣道」で「不器用な稽古」に励み、自決するまで剣道五段に昇段した。三島は「貞女は二夫に見えず」と称し、吉川の転勤先の警察署の剣道場でも稽古に励んだ。

吉川は、三島らの門下生に便宜を計り、毎週日曜日に碑文谷警察署、のちに京橋の警視庁広報センターの剣道場で指南を続けた。要するに、三十代になって剣道を始めた三島は、文字通り「中年剣道、旦那剣道」だが、「好きを通り越して、剣道きちがい」として修業に励んだ（三島由紀夫「わが警察流剣道」）。

ところが、三島が剣道五段（居合道初段）の腕前を存分に発揮したのが、あの「三島事件」だった。三島は自衛隊市ヶ谷駐屯地の総監室で総監を不法監禁して自らの要求を貫徹するため、剣道の竹刀や素振りの木

刀ではなく、真剣白刃の「関の孫六」で大立ち回りを演じ、自衛隊幹部八名に重軽傷を負わせた。その後、三島は正面バルコニーで天皇護持、憲法改正、自衛隊の決起のアジ演説をしたあと、割切自殺をした。

その時、私は広島にいた。理髪店で散髪をして貰っていたら、テレビで三島の演説が放映されていた。三島の演説はヘリコプターの騒音で聞き取ることはできず、その翌朝の新聞で割腹自殺を知った。

三島の行為にショックを受けなかったと言えば、嘘になる。ただ、私はその前年、映画『人斬り』で三島の「乱闘シーン」と酷（ひど）い「切腹シーン」の迫真の演技にショックを受けた。私はあの映画は「三島事件」の予行演習だったのかと、冷めた思いで事件を受けとめた。

三島は、自宅では日常的に酒をたしなむ習慣はなかったそうだが、文人や演劇人、そして剣道の稽古や親善試合のあとの親睦会で酒宴につき合うことは厭（いと）わなかった。

警察署の剣道場の稽古のあとの酒宴で、三島は「ここは警察署の中だから、未成年者でも、つかまることもなかろう」と言って、高校生剣士にビールをつぎ廻ったというエ

ピソードが伝えられている。

三島は『奔馬』でクーデター計画を謀議する格好な舞台を物色していた頃、警察関係者のルートで梁川の情報を得たのであろうか。

私は東京でのいわゆる「雨読」の生活でこのエッセーを書いた。梁川の「晴耕」の生活は「猫の手も借りたい」ほど畑仕事に忙殺され、この地での聞き取り調査をしないことにした。

梁川の住民は、『奔馬』で描かれた当地の晩秋の風景はあまりにも日常的であって、その絶景の醍醐味を満喫しても、三島のように文学的な表現に思い至ることもなからう。そのこともあって、私はこの拙文を書いてみた。

事務局日より

※史遊会発足当時のメンバーが十年に亘って書きとめた冊子をまとめた合本『史遊』ができました。7月の討論会は、これをもとにした「感想討論会」とのこと。

二千元にて配布いたします。